ミュージアム通信

小川原脩記念美術館 ☎21-4141
観覧料：一　般　500円（400円）
高校生　300円（200円）
小中学生　100円（50円）

倶知安風土館 ☎22-6631
観覧料：一　般　200円（100円）
高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は9時～17時
入館は16時30分まで
※（　）内は10名以上の団体料金
3月の休館日　毎週火曜日

展覧会のお知らせ

■第1展示室

小川原脩展「遥かなるイマージュ」

常に新たな芸術と社会のさまざまな潮流を感じ取りつつ、〈個〉としての自らの創作姿勢を貫いた画家・小川原脩の、70年におよぶ画業をたどる展覧会です。

会　期：開催中～5月15日㈰

■第2展示室

渡会純价（わたらいじゅんすけ）展　音楽がつむぐ　わたしの世界―坂井コレクションより

小樽市出身、札幌で活躍する版画家・渡会純价さん。爽やかな色彩や音楽性に富んだ作品は多くのファンに親しまれ、そのうちの一人、倶知安にギャラリーを構える坂井和子さんのコレクションから紹介します。

会　期：開催中～4月17日㈰

アート・イベントのお知らせ

■ミュージアム・コンサート

「コンセール・アミ　春のメモワール」

日時：3月19日㈯14時～15時　会場：ロビー（無料）
出演：コンセール・アミ（佐藤貢さん・丸山みゆきさん・吉田聖子さん・塚越由り映さん・柴瑞穂さん）
定員：50名（要予約）　予約受付：3月2日㈬9時から電話申込

テノールの佐藤貢さんを中心にヴァイオリン、クラリネット、ピアノで構成される札幌のアンサンブル。クラシックから童謡まで、豊かに広がる音楽の世界をお楽しみください。

■アーティスト・トーク

「渡会純价の世界」

日時：3月20日㈰14時～15時　会場：ロビー／第2展示室（無料）
お話：渡会純价さん（版画家）

北海道版画界の草分け、そして80代半ばの現在も全道展の中核として活躍する渡会純价さん。その詩情あふれる作品世界を、作家ご本人から直接聞けるまたとない機会です。

■土曜サロン

世界のグレートアーティスト（21）
「リーゴからゴヤまで　18世紀スペイン宮廷の画家」

日時：3月5日㈯14時～15時　会場：映像ルーム（無料）
お話：柴　勤（館長）

おとなの手しごと（10）「音符の世界を旅しよう」

日時：3月12日㈯14時～16時　会場：ロビー（無料）　お相手：沼田　絵美（学芸員）　定員：10名（要予約）
渡会展には音楽をモチーフにした作品がたくさん！楽譜を飾るように旅の風景を描いていきましょう。

絵画で楽しむパリの情景（7）「パリのボヘミアン　ジュル・パスキン」

日時：3月26日㈯14時～15時　会場：映像ルーム（無料）　お話：柴　勤（館長）

■金曜ナイトサロン

「美術館でフランス語～ゼロからの旅立ち㉓・㉔・㉕」

日時：㉓3月11日㈮　㉔3月18日㈮　㉕3月25日㈮　各18時～19時
会場：映像ルーム（無料）　お話：柴　勤（館長）　定員：5名程度（要予約）

「えっ、小学生が！」

土曜サロンに加え、働く人を対象として始めた金曜ナイトサロン。前回は画家のお母さんに連れられて、何と小学生がやって来ました。中身はフランス語の勉強会なのですから、驚くやら、嬉しいやら。

この講座には、いろいろな職種の人が集まります。小学校や放課後児童クラブ、振興局、レストランにお勤めの方、そして最近ではバレエの先生も加わりました。当然ながら皆さん話題が豊富で、講座はいつも和やかな雰囲気に包まれています。

小さな生徒さん、マスクの中で何度も発音練習を繰り返していました。この子が中学生、高校生、そして大人になっても、こんな風に美術館を楽しんでもらえると良いな、とその姿を見ながらつくづく思ったものでした。

館長　柴（しば）　勤（つとむ）

感動の場 ― 点

『浅春譜』
1969年　小川原　脩　画

美しい馬と素朴なみずばしょうの対照的な配置が目を引くこの作品の題名は、「せんしゅんふ」と読みます。「浅春」はまだ寒さの残る春の初めのこと、「譜」は系譜のように順序をたてて記す意味もありますが、楽譜や譜面のように音楽の曲節を符号で記したものを指します。

二つの全く異なる絵が上下にあるようにも見える本作。上半分をしめる馬は、少々足元を気にしながら歩き始めようとするその動き、すらりとした姿態が実に優雅です。下半分には雪解け水でできた湿地から顔をのぞかせるみずばしょうが、のびやかに描かれています。そして、画面を横切る濃紺の太い平行線が、ダイナミックな北国の季節の移り変わりを暗示させます。

関係性のない二者を組み合わせる表現手法からは、小川原が若かりし頃に吸収したシュルレアリスムの影響を感じ取ることができます。「やっぱり小川原脩のシュルレアリスムの作品が、好きだな」と語る柴館長に、展示中の作品から春の先駆けとなるこの一点を選んでもらいました。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

大変だったご飯炊き ―羽釜から電気炊飯器へ―

467回

「はじめちょろちょろ中ぱっぱ、ブツブツいうころ火を引いて、ひと握りのワラ燃やし、赤子泣くともふた取るな」これはかまどでの炊飯の仕方を歌にして言い伝えているものです。

はじめちょろちょろとは、水を吸収させた米の中心部まで加熱するために、弱火で水温を上げすぎないようにすることです。米のでんぷんは60度になるとのり状になり消化吸収しやすい状態になります。ごはんがふっくらと柔らかく炊けるには中心部まで糊化（こか）させることが重要で、そのために20分程度の時間をかけて約60度で加熱します。その後、一気に強火にして沸騰させます。これが中ぱっぱです。沸騰によって米が沸き立ちバラバラになり、すき間を水蒸気が通り抜けることで一粒一粒が過熱され、余分な水分が上へと抜けていきます。ふたと釜のすき間から蒸気が噴き出し、程よく水分がなくなりブツブツと粘りのある音がしたら火を引いて（弱くして）蒸らしに入ります。赤子泣くともふた取るなとは、十分な蒸らしには高い温度が必要で、ふたを取って温度を下げてしまうと十分な蒸らしができずにごはんに芯が残ってしまうため、何があってもふたを取るなということです。蒸らしの途中でひと握りのワラを燃やすことで、強火で短時間の追い炊きをして余分な水分を飛ばし、ごはんにツヤを出し、香ばしいおこげを作り出します。ご飯を炊くには、調理場を離れずにずっと火力調整をしなければならなかったのです。

ボタン一つでご飯が炊ける電気炊飯器は、戦後の生活革命の一つといわれるのも納得の便利さですね。

▲羽釜と電気炊飯器

文：森脇　友行（倶知安風土館　学芸補助職員）